



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初期の「護国団」 Heimwehr 運動について
Author(s)	矢田, 俊隆; YADA, Toshitaka
Citation	北大法学論集, 36(1-2), 1-38
Issue Date	1985-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16470
Type	departmental bulletin paper
File Information	36(1-2)_p1-38.pdf



初期の「護国団」Heimwehr運動について

矢
田
俊
隆

- 一 はじめに
- 二 「護国団」発生の事情
- 三 国外反革命勢力の介入
- 四 主要諸州の護国団
- 五 ドイツ右翼軍団と護国団の統合
- 六 ザイベルと初期の護国団
- 七 護国団と社会民主党
- 八 相対的安定期の護国団運動
- 九 護国団の社会的構成
- 一〇 リンツ綱領と護国団の活性化
- 一一 むすび

一 はじめに

戦間期のヨーロッパ・ファシズムのなかで、オーストリアのそれは特異な位置を占め、われわれの関心をそそらずにはおかないが、そこでとりわけ注目されるのは、第一次世界大戦直後の混乱期に生まれ、オーストリアの議会制民主主義打倒に大きく寄与した、私的武装団体「護国団」Heimwehr⁽¹⁾の存在である。護国団が政治の舞台にはなばなく登場するのは、一九二七年七月のウィーン騒乱に際して、政府と協力してその鎮定に大きな役割をはたして以後のことであり、三〇年にはその指導者をはじめ内閣に送り、三三年以後のドルフス政権では決定的な地位を占めて、権威主義体制実現のために力を振った。この時期の護国団の動きについては、わが国でもかなりの程度に知られているが、それに先立つ初期の護国団についてはほとんど明らかにされておらず、立ち入った研究は皆無に近い状態である。しかし、この準備期の護国団について明確な認識をもつことなしには、オーストリア・ファシズムを正しく理解することは困難である。幸い欧米では、最近これについてすぐれた研究がいくつか現われてきた⁽²⁾。本稿は、主としてこれらの成果に依拠しつつ、初期の護国団の実体に光をあて、問題点を整理するとともに、若干の私見を述べようとするものである。準備不十分のために覚書風の概観にとどまらざるをえないが、この方面の研究の今後の発展のうえに一つの道しるべとなれば、幸いである。

(1) 第一次大戦後オーストリア各州に生まれた不正規武装団体は、Heimadienst 郷土奉仕隊、Selbstschutzverband 自衛団、Heimwehr, Heimatwehr 護国団、Heimatschutz 郷土防衛隊などさまざまな名称で登場した。本稿では、特殊な州の団体に言及する場合にはそれに対応した名称を使用するが、これらの運動一般もしくはそれらの連合体について述べる場合には、Heimwehr 護国団という名称を使用する。しかしすべての場合に正確に使いわけるとは困難で、時にあいまいな場合もあることを断っておく。

(2) 本稿執筆にあたって参考にした著書や論文は、次のものである。Charles A. Gulick, *Austria from Habsburg to Hitler*, 2 vols. 1948; Adam Wandruszka, “Österreichs politische Struktur. Die Entwicklung der Parteien und politischen Bewegungen”, in Heinrich Benedikt (hrsg.), *Geschichte der Republik Österreich*, 1954; Karl R. Stadler, *The Birth of the Austrian Republic, 1918–1921*, 1966; Alfred Diamant, *Austrian Catholics and the First Republic. Democracy, Capitalism and the Social Order 1918–1934*, 1960; Martin Kitchen, *The Coming of Austrian Fascism*, 1980; Francis L. Carsten, *Fascist Movements in Austria. From Schönerer to Hitler*, 1977; C. Earl Edmondson, *The Heimwehr and Austrian Politics 1918–1936*, 1978; Edmondson, “Early Heimwehr Aims and Activities”, in the *Austrian History Yearbook*, Vol. VIII, 1971; Bruce F. Pauley, *Hahnenschwanz und Hakenkreuz. Steirischer Heimatschutz und österreichischer Nationalsozialismus 1918–1934*, 1972; Bruce, F. Pauley, “A Case Study in Fascism. The Styriam Heimatschutz and Austrian National Socialism”, in the *Austrian History Yearbook*, Vol. XII–XIII, pt. 1, 1976–1977; Pauley, *Hitler and the Forgotten Nazis*, 1981; *Faschismus in Österreich und International. Jahrbuch für Zeitgeschichte* 1980/81; Anton Staudinger, “Christlichsoziale Partei und Heimwehren bis 1927,” in *Die Ereignisse des 15. Juli 1927*, 1979. なかでも Edmondson, Carsten, Pauley, Staudinger は最近の注目すべき研究であり、とりわけ Edmondson, Pauley には負うところが多く、感謝する。邦語のものでは、S. J. ヴルフ編 斎藤孝監訳『ヨーロッパのファシズム 上』、エルンスト・ノルチ著 ドイツ現代史研究会訳『ファシズムの時代 下』を参照した。

二 護国団発生の事情

まず「護国団」発生の事情をみよ。一九一八年の秋、戦争に敗れ、ハプスブルク帝国が瓦解し、諸民族が分離独立したあとのドイツ系オーストリアは、恐るべき混乱の渦中にあつた。前線から多数の兵士——多くは非ドイツ人——が無秩序に家路へ流れてゆく途中で、主要な道筋沿いに、住民の財産や食糧の貯蔵を脅かした。極度に悪化した経済状態のもとで、飢えた都市住民による略奪もしばしばおこつた。イタリア人の捕虜があはれるという噂も伝わった。一方、

不確定な南部国境は、ユーゴスラヴ人の侵入に脅かされた。こうした事情のなかで、戦争による無法状態と暴力行為の余波から家や農場を守るために、また外敵の侵入から国境を防衛するために、武装した一般市民の自衛集団が、自然発生的に出現したのである。それは非国家的な組織⁽¹⁾と不正規軍団であり、旧帝国軍隊の武器で装備されていた。

これらの私的武装団体は、急進化した兵士による襲撃や外敵の侵入に対する自衛のために、信条の如何を超えてオーストリア人が武器を取ったところに生まれたものであり、本来政治的なものではなかった。それゆえ、一たび混乱・無秩序・国境の不安定などの脅威が終熄するならば、徐々に姿を消してゆくことは当然考えられたし、事実山地の諸州では、こうした経過をたどった場合も少なくなかった。これらの地方では、地域的自衛団体は、まもなく、従来からの伝統的な復員軍人会、有志の消防隊、体育クラブ、ライフル銃クラブなどに似た地位を占めるようになっていった。それらはかなりの勢力をもっていたが、政治的性格のものではなかった。

しかしオーストリアでは、これらの私的武装団体は次第に、国内の敵としての「マルクス主義」に対抗する右翼軍団に発展してゆく運命をもっていたが、それには、当時の一般的な反社会主義の雰囲気が大きく影響した。

一九一八年秋のオーストリア革命と共和国成立のあとをうけて、二〇年六月までこの国はキリスト教社会党と社会民主党的連合政府に統治されたが、後者が主導権を握り、保守派をつよく刺激した。社会民主党はまた、ウィーンにおける支配的地位を利用して、首都を社会改良のモデル地区にしようとしたが、その資金は急勾配の累進課税でまかなわれたために、富裕市民に大きな不満を与えた。農村的な西部諸州と首都ウィーンの対立は歴史的なもので、戦後の食糧事情がさらにそれを悪化させ、保守的諸州はウィーン政府の権威を認めず、社会民主党の制する首都にはほとんど魅力を感じなかった。オーストリア社会民主党は階級闘争、プロレタリア独裁などのマルクス主義用語を保存することによって、事実上ほとんどすべてのマルクス主義者を統合したユニークな政党であったが、それだけに、彼らの急進主義はつ

よい反作用をもたらし、極端な反社会主義の風潮を生む結果になったのである。

社会民主党の軍事政策も、保守派を遠ざける重要な一因になった。社会民主党の陸相ユリウス・ドイチュ Julius Deutsch は、反革命の到来を恐れて、新しく「国民防衛隊」 Volkwehr を組織した。これは公式の兵力であったが、主として失業労働者から成り、事実上は社会民主党の従属物であり、その衛兵であった。それは、秩序を保ち、社会主義者の集会を守り、時には農村から食糧を徴発するために働いたが、野心的な隣国から国境を防衛する点では有能ではなく、イタリア戦線から帰ってきた非ドイツ系復員兵士による略奪を防ぐ点でも、ほとんど無力であった。それゆえ国民防衛隊は、社会主義者以外のものには受け入れがたい存在であり、これに対抗する武装勢力をつくり出したいという考えが、きざしはじめたのである。

一九一九年の春、近隣のバイエルンとハンガリーに短命ながら共産政権が樹立されたことも、社会主義反対の気持を結集するのに役立ったし、四月の中頃オーストリアのいくつかの都市で共産主義者の指導する騒ぎがおこったことも、保守派の恐怖を高めた。ブルジョアや聖職者が、戦後の不幸の大部分を、世俗的で国際的な性格の社会民主党のせいにしてようと努めたことも、効果があった。

その結果、敗走する兵士の洪水からオーストリア人を守り、なかんずく脅かされた国境を防衛するために生まれた私的武装団体は、次第にその関心を社会革命の脅威に向けはじめた。私的武装集団の多くは、最初は労働者の参加も歓迎し、実際に社会民主党員がこれに属するケースも時おりあった。例えば、初期のケルンテンの郷土防衛隊のなかには、多くの労働者が含まれていたのである。しかし大都市周辺では、「労働者護衛隊」 Arbeiterwehr がつくられて社会主義者に指導されたり、武装した都市労働者による食糧徴発が行なわれたりしたために、ロシアをモデルにした社会革命への恐怖が高まり、まず農村や小さな町の集団が、労働者に対する階級的反発を示すようになった。やがて兵士の略奪

説
や外敵の侵入という共通の危険が過ぎ去る頃になると、至るところで階級意識が高まり、武装集団は階級的色彩を帯びることが多くなった。こうして農民や小さな町の住民は、帰還した旧職業軍人に勢いをつけられて、市民防衛隊、農民防衛隊、田園防衛隊、郷土防衛隊などさまざまな名前ではばれる反社会主義的自衛軍団に、続々と加わった。保守派が

統治した地方では、これらの軍団は州や地区の役人から警察の補助部隊として認められ、武器の入手にも便宜を与えられた。

(1) ケルンテンでユーゴスラヴィア不正規軍団の侵入に対する抵抗戦が続けられたほか、東部ではシュタイアーマルク人が、隣接するブルゲンラントで、この地域のオーストリア帰属を否認しようとするハンガリー義勇兵と対決した。ティロールでは、ミュンヘンのレーテ共和国からの予想される脅威に対して、またブレンネル峠以南の南ティロールに対するイタリアの支配に対しても、抵抗が企図された。E. Weizierl, *Osterreich. Zeitgeschichte in Bildern 1918-1975*, 1975, S. 35 f., 60 参照。

(2) Adam Wandruszka, *op. cit.*, S. 360 f.

(3) 拙稿「一九一九年のオーストリア社会民主党とハンガリー・ソヴェト共和国の関係」(『北大法学論集』二七卷三・四号)参照。

(4) Edmondson, *The Heimwehr*, p. 20.

(5) これは、その後一九二三年に正式に設けられた「共和国防衛同盟」への萌芽的前身である。

三 国外反革命勢力の介入

初期の武装自衛集団を反革命の方向に引きよせたものとしては、当時の反社会主義的雰囲気のほか、次の二つの要因をあげなければならない。第一は、戦後のオーストリアが極端に急進化せず、左翼勢力の勝利が不完全にとどまった事実から、オーストリアの極右勢力が気を取り直し、部分的に達成された革命の成果を元に戻そうと決意したことであ

る。第二は、バイエルンとハンガリーの反革命的扇動家が、オーストリアの自衛軍団に支持と激励を与えたことである。⁽¹⁾ 実際、オーストリアの護国団が政治色を強めていったのは、一九二〇年の間に国の内外で企てられた諸種の陰謀に巻きこまれたことと、深い関係があった。当時バイエルンとハンガリーでは、すでにソヴェト政権は打倒され、強力な右翼政府が樹立されて、反動時代に入っていたが、両国の指導者は自国での反革命の勝利に満足せず、オーストリアの共和政府を打倒するために、あるいは少くとも社会民主党の勢力を内閣から排除するために、オーストリアの右翼と協力したのである。

バイエルンには、共産政権倒壊後多くの右翼軍団が存在したが、オーストリアとの関係で特に注目される指導者は、ゲオルク・ヒンケル Georg Escherich とルドルフ・カンツラー Rudolf Kanzler だ。共に反革命運動で名をあげ、バイエルン政府と密接なつながりをもっていた。エシエリヒは熱心なナショナルリストで、Orgesch とよばれる傘形組織を通じて、ドイツ国内のすべての右翼不正規軍団を統一しようと努めていた。彼の配下の軍団は「市民防衛隊」Einwohnerwehr とよばれた。カンツラーは一九一九年はじめ、政府から助成金を受けてバイエルン南東部にいくつかの武装団体をつくり、エシエリヒと緊密に協力して、Orgesch のためにオーストリアの護国団活動を促進しようとした。⁽¹⁾ 金と大量の武器と、熟練を積んだ指導者が、バイエルンからオーストリアへ送られた。カンツラーはナショナルリストである以上にバイエルン独立主義者であり、その見地からハンガリー政府とも接触した。

ハンガリー政府もオーストリアの共和政府を保守的な独裁政権と取りかえさせようとし、オーストリアの右翼について圧力をかけるとともに、反共和主義グループに多額の金を提供した。それは「秩序と法協会」とよばれる秘密団体を通じて配分されたが、ここでは、キリスト教社会党の将来の首相イグナツ・ザイベル Ignaz Seipel が、顕著な役割をはたした。⁽²⁾ ハンガリー政府はオーストリアで反乱が成功した場合には、貨車一五〇〇両分の小麦粉と、五、六両分の

(4) キリスト教社会党八五、ドイツ民族主義派二八に対し、社会民主党六九議席。矢田・田口著『オーストリア・スイス現代史』一八四、七九ページ参照。

四 主要諸州の護国団

オーストリアの護国団は、各州の特殊事情を反映した地方組織であり、指導者は各自の政策を自由に追求した。これは不可避免的に指導者相互間の対立や争いを生み、護国団全体の統一を妨げ、時に地方組織の連合ができて、強力な中央のリーダーシップを欠くことになった。それゆえ、護国団の歴史をたどりその実体をとらえるためには、主要な諸州の運動について立ち入って考察する必要がある。

まず第一に、当初から護国団活動の主要な中心の一つであったティロールを取り上げよう。ティロール州はカトリック信仰のつよい伝統主義的な山岳地域で、自州の特権擁護に熱心であり、ウィーン政府の集権的傾向に激しい反感を抱いていた。戦争直後主要な交通路沿いの小さな町々にいくつかの自衛団体が生まれていたが、一九一八年十一月、弁護士のリヒャルト・シュタイドレ Richard Steidle がインスブルックに、有志を集めて「秩序団」Ordnungsblock を組織した。以後ティロール州の護国団の歴史は、この人を中心に展開されることになる。一九年の春ミュンヘンに共産政権が成立すると、州政府はシュタイドレをティロール防衛委員会の委員長に任命し、新たにいくつかの地方的軍団をおこすとともに、相互間に緊密な協力関係をつくり上げさせようとした。シュタイドレはバイエルンの共産政権倒壊後も扇動の努力を続け、二〇年三月にはカンツラーとの接触を固め、バイエルン右翼のオーストリア国内での活動を助けた。彼はカンツラーの指導下に、全州的な反ポリシエヴィスト団体をつくろうと努力し、その結果五月十二日に、ティロール州の自衛組織である「護国団」Heimwehr が、シュタイドレを指導者とし州副知事を代理人として正式に設立

され、確実な秩序の維持を約束した⁽²⁾。新団体は二〇年末までに、二万人の団員を集めたという。

シュタイドレは、第一次大戦後イタリヤに奪われた南ティロールの出身だっただけに、心情的にはドイツ民族主義に傾いていたが、政治的にはキリスト教社会党と緊密に提携し、一九一八―三四年の間に、州と連邦双方のレベルで種々の地位を占めた。彼の身上は忍耐力和演説家としての才能にあり、短いあごひげをもちいくらか前かがみの温和な市民にみえた彼が、一たび演壇に立つと、はなやかな雄弁で人々を魅了し興奮させた⁽³⁾。彼は護国団指導者中割に知的な人物といわれたが、州的視野を越えることはなく、しばしば激情に圧倒された。その演説は、ブルジョアジーがポリシェヴィストと非民主的に妥協したことを非難し、敵を政治的にせん滅すると威嚇するものであった。

シュタイドレの参謀長は、ヴァルデマール・パプスト Waldemar Pabst 元大尉であった。彼は旧ドイツ参謀本部の一員で、プロイセンからの亡命者であり、傑出した組織力をもち、疲れを知らぬ活動家であるとともに、生来の陰謀家であった。一九一九年一月カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクを逮捕・殺害した師団の参謀長として知られ、二〇年三月のカップ一揆の計画にも参加し、その失敗後ドイツを逃れ、ハンガリーを経てティロールに移り、州政府の好意で居住権を得たのである。

彼は二二年五月一日正式にシュタイドレの参謀長になって以後二七年まで、全国的な護国団をつくりあげるといふ野心的計画をもち続けた。金と武器を入手する術を心得、国外に有力な知己をもち、護国団を誇示するのに巧みで、正規軍や警察のなかにも影響力を浸透させようとした。本国ドイツにも奉仕し、二三年以後数年間、外相のシュトレーゼマンにオーストリアと南ティロールの情報を伝えた。断固たる反マルクス主義を信条とし、いかなる政治的社會主義、共和主義的デモクラシーにも反対した。

アルプスの中心部からユーゴスラヴィアとハンガリーの国境にのびるシュタイアーマルク州も、ティロールと統合す

る護国団運動の一中心であった。一九一八年秋にはこの州も帰還兵士の洪水に充たされ、翌年にはハンガリー共産革命の恐怖を経験し、ドラウ川地域がユーゴスラヴィアに譲渡されると南からの侵入の恐怖を味わい、多数の私的自衛軍団が発生した。

人種の混合度が高く、旧帝国時代には一〇〇万弱のドイツ人と四〇万強のスロヴェニア人を含み、後者は南部三分の一の地域に住んでいた。州都グラーツは、大学人と官僚の間に反聖職者主義と人種的ナシヨナリズムが強く、「国内の最過激都市」という評判を得ていた。言語境界線の近くや大学内では長い争いの歴史があり、ドイツ人の利害を守るために多くのクラブがつくられた。戦後サン・ジェルマン条約が、純スロヴェニア人地域だけでなく、三万五千のドイツ人をもつこの州第二の都市マルブルク Marburg (Maribor) をもユーゴに譲ることを強いたために、ドイツ系州民とスロヴェニア人の間に不正規軍団の争いがおこり、譲渡された地域からは多くの避難民が北に移って、不正規軍団に加わった。州南部では、医師のウィリバルト・ブロードマン Wilibald Brodmann が「下オーストリア農民別働隊」⁽⁴⁾ Bauernkommando を組織し、スロヴェニア人に対抗して、隣接するケルンテンおよびハンガリーの不正規軍団と協力しようとした。

州中央部では、一九一九年四月共産主義者の指導で飢餓暴動がおこったこと、ベーラ・クンのハンガリーから共産主義者が国境を越えて侵入したことなどが、自衛軍団の発展を刺激した。ここでは、前法学教授アントン・リンテレン Anton Rintelén の手で「シュタイアーマルク護国団」Steirische Heimwehr がつくられた。彼は二一三三年の間にしばしば州知事をつとめた人物である。リンテレンの軍団は最初からキリスト教社会党と提携し、共産主義者による騒ぎの鎮定に力を貸し、二一年にはブルゲンラントを防衛した。州北部には外国の侵入はほとんどなかったが、その工業化された地域でマルクス主義の宣伝が効果をあげ、いくつかの工業中心地では社会主義者が地方行政を制した。これに

対抗してユーデンブルクの弁護士ヴァルター・プフリマー Walther Primer が、一九一八年の夏「ドイツ民族会議」Deutsche Volksrat を組織したが、州内部の団体では、軍事的目的よりも政治的目的の方がはるかに重要な意味をもった。こうして生まれた自衛軍団は、あるものは政党と提携しあるものは独立を唱え、団員と支持者をもとめて競い合ったので、統一は容易に成立しなかった。カトリックの政党「キリスト教社会党」と民族主義的・反聖職者的地主を代表する「農村同盟」との間に激しい対立があったことも、統一軍団の形成を妨げる一因となった。しかしここでも、やがてより大きな統一軍団をめざす動きが現われた。それに力を貸したのは、州政府の幹部とりわけ知事のリンテレンと副知事のヤーコプ・アラー Jakob Ahrer で、共にドイツ民族主義的傾向をもつキリスト教社会黨員であった。二人は、諸団体をまとめようとするカンツラーに協力した。一九二〇年六月、カンツラーは三つの反社会主義政党——キリスト教社会党・農村同盟・大ドイツ人党——を説得し、プフリマーとブロードマンの団体をリンテレンの護国団に組み入れた形の全州的不正規軍団を支持させることに成功した。しかしこの合作は、実際には護国団の活動を制限する結果になった。特に、三政党のうち少なくとも二つの代表が命令に署名しなければ、武装団体は行動をおこしてはならないという合意が成立したのちには、制限が一段ときつくなり、プフリマー配下の組織はこの指令を拒否した。ブロードマンとプフリマーは汎ドイツ主義を抱き、すべての政党に敵意をもっていたので、リンテレンのキリスト教社会党との協力関係と衝突したのである。三政党によってつくられた薄弱な連合体は、二一年四月分裂するに至った。⁽⁵⁾一年後プフリマーの指導下に「シュタイアマールク自衛隊」Selbstschutzverband Steiermark が設立され、のちに「シュタイアマールク郷土防衛隊」Steirisches Heimatschutz と改名した。

次にケルンテンをみれば、ここでも、一九一九年の南スラヴ人の侵入に対する防衛戦に活躍したブルジョアや農民の集団は、翌年の間に反社会主義的なものに変わっていった。ケルンテンの「郷土防衛隊」Heimatschutz は、シュタイ

アーマルクの団体よりも大きく——団員は四万を教えた——見解も均一であって、つねに活動的であり、手ごわい外観をみせた。一九年の反ユーゴ宣伝をドイツが支持したために、ケルンテンの右翼は二三年一杯、バイエルンの組織と密接なつながりを保った。しかしケルンテンの軍団は、護国団運動で指導的役割を演ずるには至らなかった。それら一つには、この州のプロレタリア人口がシュタイアーマルクの場合ほど重要性をもたなかったためであり、今一つには、郷土防衛隊の指導部が、ティロールの指導者のようになつよい功名心を欠いていたためであった。ケルンテンの軍団は郷土の防衛を第一の任務としたために、超政党的であり、戦後の激しい政党争いのなかにあって、政治的意味の少ない、一種の伝統的団体に発展したのである。⁽⁶⁾

一九二〇年代初期に、不正規軍活動の第三の重要な中心になったのは、ウィーン周辺地域であった。社会民主党のとりでであった首都では、ミドルクラスの感じた脅威は大きかったが、その構成が雑多であったために、戦後一年間はブルジョアの不正規軍団は出現しなかった。しかし一九二〇年の冬になって、首都での暴力革命の恐れが消えると、旧将校を中心とする戦闘的な反社会主義者は、気力を取り戻しはじめた。二〇年二月、彼らは、旧帝国軍の将校と下士官兵から成る「歴戦勇士会」Frontkämpfervereinigung [FKV]の指導委員会をつくり、「全体の利益はささいな政党政治に優先しなければならぬ」というスローガンを採択した。その指導者ヘルマン・フォン・ヒルトル大佐 Hermann von Hiltlは熱狂的なドイツ民族主義者であり反ユダヤ主義者であって、三月八日に開かれた最初の公開集会で、新団体のスポークスマンは、ユダヤ人が不幸と飢餓をあやつってオーストリアの愛国者たちを苦しめていると論じ、ユダヤ人を罵倒した。

FKVはまもなく、ウィーン、首都周辺の下オーストリア、ブルゲンラントで大部分の反社会主義不正規軍団を支配するようになり、国内各地にも支部がつくられ、二〇年末には五万の会員をもつに至った。しかしウィーン周辺以外

では、友愛団体と考えられ、会員は政治的には他の団体に加わる傾向があった。FKVと他の護国団グループとの間には、前者の激しいドイツ民族主義と反ユダヤ主義のために多少の摩擦はあったが、⁽⁷⁾まもなく密接なつながりが発展した。

- (1) Heimatschutz in Österreich, 1930, S. 239; Edmondson, "Early Heimwehr", p. 110.
- (2) Rudolf Kanzler, Bayerns Kampf gegen den Bolschewismus. Geschichte der bayerischen Einwohnerwehren, 1931, S. 89-92; Edmondson, op. cit.
- (3) Edmondson, op. cit., p. 111.
- (4) シュタイアーマルクの護国団について Paulley, "A Case Study", pp. 252-256 が詳しく。本章のこの部分の記述は、主としてこれに依つてゐる。
- (5) Paulley, op. cit., p. 255.
- (6) Edmondson, The Heimwehr, p. 23f.
- (7) Edmondson, op. cit., p. 24.

五 ドイツ右翼軍団と護国団の統合

ドイツ人とオーストリア護国団運動とのかかわりのなかで、特に注意を引くのは、バイエルンのカンツラーがオーストリアに統一組織をつくろうと努めたことである。彼の努力がどのような経過をたどったかを、次にやや詳しくみてゆきたい。

ウィーン地域のその他の反社会主義者たちは、バイエルンに助力をもとめた。カンツラーは、諸州での作業がさらに進むまでウィーンにかかわりなくなかったし、ハプスブルク家に忠誠な人々と極端なドイツ民族主義者の間に克服しが

たい敵意があることも、よく知っていた。しかし、彼のこうした懸念にもかかわらず、いくつかの体育会、復員軍人会、学生団体は彼と協力することで話しをまとめ、ドイツ民族主義者を満足させるために、「合邦」問題がはっきりするまで王朝問題は論議しないという合意が成立した。その交渉には、大ドイツ人党とキリスト教社会党の代表——ザイペルも含まれた——も参加し、ハンガリー政府からの財政的支持も与えられた。⁽¹⁾

こうした動きは、全オーストリアの護国団連合をつくり出そうとするカンツラーのために、好都合な下準備を整えた。七月二十五日、エシエリヒとカンツラーも出席したミュンヘンの会談で、オーストリア全土から集まった護国団指導者たちは、「カンツラー協会」 Organisation Kanzler [Orka] という名の連合体で、いっしょに働くことに同意した。バイエルン側もできる限りの援助を約束し、最終目標は全ドイツ人の統一にあると説明した。⁽²⁾

こうして一九二〇年の夏、バイエルンの後援のもとに、全オーストリア護国団組織の連合がはじめて成立した。しかしそこでのカンツラーの地位は、決して強固ではなかった。連合成立後の八月から九月にかけて、オーストリア・バイエルン・ハンガリーの陰謀家たちは、オーストリアの連合政府に反対する武装反乱の促進について、再び協議した。その過程で若干のオーストリアの指導者は、カンツラーがハンガリーの陰謀家に親密な態度をとるのに疑いを抱きはじめた。カンツラーは全ドイツ人の統一よりもバイエルンをドイツ共和国から切り離す計画の方により、大きな関心をもち、そのためにハンガリーの支持を求めているのではないかと怪しんだのである。パプストやシュタイドレはこうした分離主義を是認したが、オーストリアの民族主義者の大部分はドイツとの「合邦」につよく惹かれており、ドイツの解体を望まなかった。そこでカンツラーは、オーストリア人の信頼を保持し彼らをまとめてゆくために苦慮したが、結局彼は、一般に受け入れられるリーダーシップの確立に失敗することになる。

ここで、オーストリア護国団連合に対する連合国側の態度をみておく必要がある。一九二〇年から翌年にかけて、連

合国防事管理委員会はオーストリア政府に、不正規軍団を解散させ、武装解除を行なわせようとした。委員会はカンツラー下の連合を名目的なものと考えてはいたが、各州の護国団がもはや単なる自衛集団でないことは明らかであったから、一般市民の武装を講和条約違反とみなし、オーストリア駐在の連合国防官は二〇年十一月、護国団を解散させ武器貯蔵所を没収するよう、オーストリア政府につよい圧力をかけた。しかし連合諸国の政府の方は、なお中欧におけるポリシェヴィストの脅威を重大視し、軍事委員会ほどの圧力はかけなかった。オーストリア政府は講和条約尊重の意向を述べ、事態が正常に復帰すれば非合法の軍事組織は自然に消滅すると請け合ったが、結局各州政府に、軍事的性格の私的団体に法的承認を与えぬよう勧告し、一年後には、武器の使用と軍事訓練をはっきり禁止させた。しかし、役人たちは、行政のあらゆるレベルで引きのばし戦術や生ぬるい処置をとったので、連合国防側の干渉は護国団の活動に明白な影響を及ぼさなかった。⁽³⁾

こうしたなかで、オーストリアの護国団指導者たちは、二〇年秋から翌年にかけてしばしば会合を続け、一月には、オーストリアが解体するかもしれぬ可能性について話し合い、さまざまな不慮の事態にいかに対処すべきかを討議した。これにはカンツラーとリンテレンも参加し、護国団はウィーンの周辺地域以外では秩序を維持するに足る力はあるが、外国の侵入を撃退するには不十分であるから、南スラヴ人が攻撃を再開する場合には、ケルンテンの郷土防衛隊はイタリアの助けを求めても差支えないという結論に達し、左翼による反乱がおこるか中央の権威が崩壊する場合には、諸州は独立を宣言し、独力でドイツとの合体を求めらるべきであるという点で一致した。⁽⁴⁾

この頃護国団の関係者たちは、当時のマイヤー官僚内閣に代わる右翼政府の樹立を考え続けた。これを考慮に入れて、ザイペルとチヘルニン Otthkar Czernin (旧帝国外相で当時は国会議員) は、二月二十六日、オーストリアに強力な反社会主義兵力を用意するために援助を与えてほしいと、ハンガリー政府に要請した。三月五日にはシュタイアーマ

ルク州副知事アーラーが、自州の製造業者協会、著名な銀行家、若干の大地主を説いて、護国団に五〇〇万クラウンを寄付させたが、これも反乱計画と関係があった。ティロールの護国団がバイエルンのさる筋から毎月一四、〇〇〇マルクを受け取ったのも、この頃のことであった。

しかし反乱の策謀者たちは、またしても不本意のうちに危険な企図から後退した。それにはいくつかの理由があった。失敗の不安もあったし、オーストリアが連合側側に食糧を必死で頼っているときに、不利な反響をよびはしないかという懸念もあった。一九二一年の春前国王カールがハンガリーで復位を企てて失敗したあとの混乱も、オーストリア正統主義者の希望をくじいた。他方、ブルゲンラントをめぐるオーストリアとハンガリーの間の論争は、ハンガリーの保守派にオーストリアの右翼支援を一時中止させるに至った。こうしたなかで、カンツラーのつくった貧弱な連合はくずれはじめ、二一年末頃には、外国からの助成金も大幅に減少した。

カンツラー下の護国団連合がくずれてゆく過程で、護国団の指導者たちとそれにつながる外国勢力のなかでは、はげしい対立が復活した。カールの不成功に終わった反乱の企図をめぐって、護国団のドイツ民族主義者の間には、カンツラーがバイエルンとオーストリアとハンガリーを含むカトリック王国の樹立を前国王に勧めていたのではないかとの疑惑が、さらに強まった。カンツラーはこれをバイエルンのライバルによる中傷と否定したが、二一年には彼の運動の基盤であったドイツの「市民護衛隊」が解散して、打撃を与えた。八月中旬ついに彼は、「合邦」に好意的なケルンテンの郷土防衛隊の圧力をうけて、オーストリアの護国団連合 O.N.G. の指導者を辞任した。護国団を統一しようとする彼の努力は、わずか一年余りで終わったのである。

しかしカンツラーが退いても、オーストリアの不正規軍団とドイツ人のかかわりは終らなかつた。カンツラーの後を継いで、なお数カ月間名目的に存続した O.N.G. の指導者になったのは、オットー・ピッティンガー Otto Pittinger だ。

彼は一九二三年までオーストリア内かなりの影響を及ぼした。しかし彼には、ルーデンドルフ Erich Ludendorff というライバルがあった。ルーデンドルフはドイツの東方進出再開に役立つと考え、ドイツ人とオーストリア人から成る不正規軍部隊を組織したいと願った。彼の代理人マックス・パウアー大佐 Max Bauer——パプストと共にカップ一揆に関係した人物——はウィーンに司令部を設け、新しい護国団連合の中心になろうとした。こうして、二三年十一月にヒトラールーデンドルフのミュンヘン一揆が失敗するまで、「キリスト教的『保守的な』ドイツ人の行動主義者と『民族的』『国民的な』ドイツ人の行動主義者とが、オーストリアの護国団に対する指導権をめぐる争うことになった。しかし戦争直後の諸革命の衝撃が色あせるとともに、カンツラー同様にずれも成功しなかった。競合関係にあるドイツ人が護国団問題にかかわり続けたことが、護国団組織を再統一しようとするオーストリア指導者たちの新しい努力をかえって妨げる結果になった点にも、注目する必要がある。

- (1) Kanzler, Bayerns Kampf gegen den Bolschewismus, S. 101 f.; Edmondson, "Early Heimwehr", p. 115.
- (2) Kanzler, op. cit., S. 104.
- (3) Edmondson, op. cit., P. 117 f.
- (4) Edmondson, op. cit., p. 118.
- (5) Kanzler, op. cit., p. 105.

六 ザイペルと初期の護国団

次に、オーストリアの主導で行なわれた護国団統一の試みに目を向けよう。それは、一九二二年五月ザイペルの首相就任後におこった。ザイペルは、さまざまな護国団グループを政府の頼もしい擁護部隊に仕上げたいと考え、すでに西

部五州の主要な護国団組織を支援していた工業家たちに、連邦政府を通じて助成金を送るよう勧告した。寄付をうける諸団体が彼の政権を後援する「統一された護国団戦線」を形成することを望んだのである。とりわけ下オーストリア・ウィーン・シュタイアーマルクでは、護国団指導者間のイデオロギーや人間的な差異が著しかったので、ザイベルは、彼らが共通の綱領とリーダーシップについて合意してくれることを望んだ。しかしこれは困難な仕事であった。なぜなら、国内の多くのグループは依然オーストリア自身の立場で考えることを好まず、バイエルンとのつながりを保持すべきであると主張したからである。

それでもザイベルは、短期間護国団を統一させることに成功した。非社会主義三政党の代表に指導される不正規軍連合の設立という彼のプランは、勢力拡大を望むパプストとシュタイドレに支持された。二二年六月パプストは、ザイベルあての覚書で、さまざまな非常事態を想定し、政府の頼りになる軍事組織の創設に力を貸すと申し出た。これをうけてザイベルは、政党代表から成る四人委員会をつくり、シュタイドレがキリスト教社会党代表の一人として、委員長の資格でこれに加わった。シュタイドレは、委員会の毎月の活動のために、また各州部隊の月々の活動のために、五、〇〇〇万クラウンの予算をザイベルに要求した。保守的諸団体特に製造業者中央協会は、護国団の中央管理の確立を期待して、シュタイドレ委員会の要求した資金の供与を約束した。⁽¹⁾九月には毎月一億五、〇〇〇万クラウンに増額されたが、そのうち八、〇〇〇万は、ウィーンと下オーストリアに割り当てられるはずであった。これら二州の諸団体も、二三年二月このような財政的援助の約束を得たのち、新しい全オーストリア護国団連合の設立を認めた。

しかしこの連合も、わずかの期間しか存続しなかった。相変わらずの指導権争いが、最初から重大なハンディキャップをなした。ドイツ民族主義グループ——特にシュタイアーマルクとケルンテンのそれ——は、自分たちの受ける助成金の割合が不当に少なすぎると不平を述べた。連合を構成する組織のいくつかは、ザイベルが国際連盟の援助で多額の

国際借款を得た見返りに「合邦」を放棄したために、ザイペル支持を好まなくなった。また幾人かの護国団指導者は、ザイペルが社会民主党に柔軟な態度をとった——社会民主党がその不正規軍団「共和国防衛同盟」の承認をうけるためにザイペルの借款条約を認めたことによる——ことを責め、ザイペルとの協力に基づくシュタイドレの指導権に挑戦しはじめた。その結果シュタイドレは、護国団の国政への影響力をはっきり保証してくれるよう、ザイペルに要求せざるをえなくなった。⁽²⁾

一九二三年一月十六日、シュタイドレはザイペルに強硬な最後通牒を送り、指定された援護的役割には我慢できないと述べ、護国団にかける壮大な野心をはっきり示した。彼は首相官邸への直接の出入りを要求し、護国団をオーストリア政治の決定的要因にするつもりであると伝えた。この横柄な要求に応じて、ザイペルは工業家からの助成金を断つ態度に出た。首相は不正規軍団の必要を感じてはいたけれども、護国団の指導者に政治上の優位を与えるよりは、むしろ護国団戦線が諸州のグループに分裂する方を選んだのである。ここに政府と護国団戦線の協力関係は終わり、シュタイドレは一月末に実行委員会を退いた。それに続いて、オーストリア内での支配的発言権をもとめる争いが、ルーデンドルフに好意的な一派とピッティンガーに好意的な一派の間におこったので、護国団戦線は完全に分裂した。

しかしシュタイドレとパプストは、強力な一大護国団を樹立しようとする希望を捨てたわけではなかった。彼らは護国団を独自の政治的勢力にするために、自身の財政的支持源を求めようと決意し、そのために、ウィーンおよび下オーストリアの団体と協力することを躊躇した。これらの団体は、財政的援助を受けるにあたって、依然ザイペルないし警察長官ショーバーの仲介に頼っていたからである。シュタイドレとパプストはまもなく、フォアアルベルク・ティロール・ザルツブルク・ケルンテン・上オーストリアの護国団の設立した「アルプス諸州同盟」*Bund der Alpenländer*で支配的勢力を得るに至った。この同盟は最初は、名目上ピッティンガーの「バイエルンおよびドイツ国同盟」*Bund*

Bayern und das Reich と関係があつたが、シュタイドレはこのつながりを断つために、ピッティンガーはバイエルンで勢力を失いつつあること、ルールの危機やインフレの急激な増大からみて、オーストリア人はドイツに顔を向ける危険をさけるべきであることを力説した。そして四月末にシュタイドレは、こうしてドイツから分離したアルプス同盟の中央指導者に選ばれた。この同盟を構成する各団体はなおかなりの自主性を保持したが、諸州の政府と製造業者協会は十分な財政的援助を与えた。⁽¹⁾

- (1) Rape, "Die österreichische Heimwehr und ihre Beziehungen zur bayrischen Rechten zwischen 1920 und 1923" は未見であるが、この間の事情を明らかにした重要な学位論文(未公刊)といわれる。Edmondson, op. cit., p. 122.
- (2) Edmondson, op. cit., p. 123.
- (3) Edmondson, The Heimwehr, p. 32.

七 護国団と社会民主党

次に、護国団と社会民主党の関係をみよう。以上のような護国団の動きは、社会民主党の不安を高めずにはおかなかつた。当時内外の情勢は、社会民主党にとって好ましいものではなかつた。オーストリアを取り巻く諸国は、すでに反動優位の様相をみせていた。イタリアは一九二二年十月のムッソリーニの勝利ののち、反革命的なホルティのハンガリーの仲間入りをした。ドイツでは、社会主義的なベルリンよりも保守的なミュンヘンの方が、ずっとウィーンに近かつた。国内では、ザイペル首相は敵意に充ちた、有力で抜目のない相手であつた。そのザイペルは、借款の約束とともに、連合国側が非社会主義的私設軍団の発展に反対しないという保証を、ジュネーヴからもち帰つていた。⁽¹⁾ 社会民主党は、護国団が兵器を増強しつつあることを感じとる一方、シュタイアマルク・ケルンテン・ティロールの町や村で日

曜日にはしばしば行なわれるパレードや示威運動に悩まされていた。これらの地方では、農民は「赤」が農場を焼こうとしていたと警告されていた。二二年十一月には、シュタイアーマルクのユーデンブルクで、ストライキ中の労働者とフリーマー配下の数千の護国団兵士との間に緊張した武装対決がおこって、社会民主党を驚かした。ユリウス・ドイチュのあとをうけて陸相になったキリスト教社会党のファウゴイン Carl Vaugin は、国民防衛隊を保守的な連邦軍 Bundeswehr に変えはじめたが、この連邦軍は護国団とともに、ウィーンにおける社会民主党の政治的優位にとってはおもより、社会民主党の存在自体にとっても、将来重大な脅威になる恐れがあった。

社会民主党は宣伝と具体的対抗策でこれに応じた。ドイチュは大衆の注意を集めるためにパンフレットを発行して、「ファシストの危険」について警告し、「内乱のために武装しつつかあるのは誰か」と問いかける一方、すべての非公式市民軍団の武装解除を提唱したが、反対派はもとより耳を傾けなかった。そこで社会民主党の指導者は、一九二三年のはじめに、護国団に対抗する軍事力をつくり出すとともに、自党のデモを守りかつ統制するために、従来の党護衛隊を武装労働者の全国組織「共和国防衛同盟」*Republikanischer Schutzbund* に変える計画をつくり上げた。連邦政府の承認を得て四月に発足したこの新しい私的軍隊は、公式の目的は護国団のそれと大差なかったけれども、社会民主党の中央指導部に責任を負う点が、護国団と対照的であった。

共和国防衛同盟の設立は、社会民主党の自衛的対応であったが、護国団の指導者たちには、「赤い」軍隊に対して国を守るための必要を力説するためのよい口実を与えた。彼らは護国団の組織を拡大するために、フランス軍のルール地方占領や議会選挙によって引きおこされた興奮を利用する一方、内部では、パレードや旗の献納や射撃競技や軍事演習などによって、団員の忠誠心と警戒心を高めようとした。二三年九月にケルンテンの郷土防衛隊がクラীগエンフルトの近くで催した旗の献納と大集会には、一万五千人が集まったが、群集のなかには、フリーマーに率いられた一千人の

シュタイアーマルクのゲストと、シュタイドレ配下のティロールの小代表団が含まれ、シュタイドレ自身も重要な演説を行なった。⁽⁵⁾ このような誇示の努力のほか、社会民主党系労働者との間には定期的に種々の衝突がおこったが、これも護国団にとっては、自身を存続させる上の大切な要素であった。普通は、居酒屋での口論に端を発するなぐり合いの喧嘩や、政治大会での野次に挑発された小論争や、ストライキに関係する暴行など、概してささいな事柄であったが、二三年には、ナチスおよびFKVとの政治的口論が原因で、二人の社会主義者が殺されている。⁽⁶⁾

しかしながら、一九二二—二七年の時期は、戦間期オーストリアの唯一の安定期であり、護国団と防衛同盟の間にも小ぜりあいが続いただけであった。二一年十二月にチェコスロヴァキアとの間に結ばれたラナ条約は、オーストリアとこの国との貿易を促進し、翌年十月ザイペル首相が国際連盟から得た借款は、経済の回復を可能にし、インフレも終熄した。二四年の通貨改革はさらに経済の改善に寄与し、翌二五年には、共和国成立後始めて連邦予算が均衡を保った。政治的にも、二三年十月の議会選挙で非社会主義政党の多数が再確認され、一方ドイツ内部の危機も緩和され、オーストリアの政治生活はやや安定するようにみえた。諸州で連合政府が形成されたことも、聖職者と社会主義者の敵対を減らす効果があった。

この時期には、不正規軍団が目につく役割を演ずることは少なかった。彼らが暴力行為に走ったり政治力を行使したりする可能性は残ってはいしたが、一九二七年の初期までは、内乱に発展するような恐れはほとんどなかった。この時期の護国団の活動は一見不活発であったために、大部分の研究書もそれについて沈黙を守っている。しかし、はたして実情はどうであったか。次にこの点を検討しなければならない。

(1) Edmondson, op. cit.

(2) Gulick, op. cit., Vol. I, p. 130 f.

- (3) Julius Deutsch, Die Faschistengefahr, 1923; Edmondson, op. cit., p. 125.
 (4) Gulick, op. cit., p. 132 f.
 (5) Heimatschutz in Österreich, 1943; Edmondson, op. cit., p. 126.
 (9) Julius Deutsch, Wer rüstet zum Bürgerkrieg?, 1923, pp. 37-42.

八 相対的安定期の護国団運動

一九二四—二六年のオーストリアの安定期も、経済的・政治的に健全なわけではなかった。ザイペルの財政再建は彼に威信をもたらし、キリスト教社会党を強化するかにみえたが、それは、苦しい耐乏という犠牲のうえに得られたものであった。国際借款の条件として課されたきびしい節約は、幾千もの公務員の解雇を必要とし、軍隊の人員も二万強まで減らさねばならなかった。インフレの終熄に伴う工業部門の再調整は、多くの新規事業を清算させ、生産の衰退と失業の増大をもたらした。ただ、通貨が安定し予算がバランスを得た後には、工業は若干資本を引きよせ、主として合理化によって、二五年から二九年のはじめまで生産は緩慢ながら着実に上昇したが、雇用には逆効果を与え、失業者の数は一〇万を下らなかつた。⁽¹⁾

政治面では、一九二四—二六年の間は、権力を求める戦いは正規の政治団体、政党によって行なわれたが、国内の対立がいやされたわけではなかった。二三年の議会選挙でキリスト教社会党は前回の四二%を上まわる四五%の票を集めたが、社会民主党も三六%から四〇%に票をのぼし、両党共に、長期的には自党が不変の優位を得るであろうと期待した。ザイペルは自党の成果が予想を下まわったので落胆したが、二四年十月まで首相の地位を保持し、同じ党のルドルフ・ラメーク Rudolf Ramek に譲った。ラメーク内閣は約二年間続き、若干の成果をあげたけれども、自党の指導者

——アーラー蔵相（シュタイアマルク州の前副知事）も含まれていた——に累を及ぼす銀行汚職事件に巻きこまれ、永続的な経済沈滞のなかで苦境に陥り、二六年十月辞任した。かわってザイペルが再び組閣したが、以後二大政党はいずれも自党の立場をつよく打ち出し、国内政治はきびしさを増した。

こうした事情を念頭におきつつ、相対的安定期の護国団活動に目を向けよう。従来これについてはほとんど知られていなかった。一九三四年に出版された護国団運動の公式の歴史のなかにも、この時期の活動はほとんど記されていないし、ドイツの外交官の報告にもなく、国民議会でもそれにはほとんど言及されていないのである。

しかしこの沈黙をそのままのみにすることはできない。たしかにこの時期には、実際活動のための中央本部や司令部はなかったし、ウィーン地区では、いくつかの護国団組織が辛うじて生き続けるためにたがいに争わねばならぬといった状態であった。⁽³⁾しかし、一九二三年までにすでに地歩を固めていた西部や南部の諸団体は、単に自己の存在を維持する以上の活動を行っている。シュタイドレとバプストは早くも二三年に、オーストリアにおける政権獲得を究極の目的とし、直接の目標としては、「赤」のテロリズムに対する防塞をつくり、闘争心を喚起し、「赤い」都市での街頭支配をめざして戦うことをかかげた。明らかに護国団の指導者たちは「積極的」大志を抱き、護国団を、「革命」のもたらした社会改革の多くを旧にもどすための手段とみなし、工業界・政界の財政的援助者の多くも同じ考えをもっていた。イタリアにおけるムッソリーニの成功の範例が彼らに大きな感銘を与えたのは、当然である。シュタイドレ・バプスト・リンテンらの指導者は、オーストリアに反社会主義独裁政権を樹立するために、彼らの軍隊を使うことを夢見たのである。彼らは、財産家と軍隊の指揮者が協力して社会的階層制度を支配するような秩序、小市民階級や官僚や独立農民の利益もどうか守られるような秩序を回復したいと考えた。労働者は、一たび「社会主義的詐欺師」の影響から解放されるならば、喜んでこのような体制を支持し、社会的ピラミッドの重みに耐えるであろうというのが、彼らの信

念であつた。⁽⁴⁾

各州に目を向ければ、ティロールは相変わらず護国団活動の中心地で、シュタイドレとパプストは州軍隊の司令部と緊密なつながりを保ち、戦争や革命の際に軍隊と協力する計画を立てた。彼らは機動演習を行ない、その兵士が社会主義者の集會を粉砕するのを許した。この州の護国団は、一九二四年十月「ティロール護国団新聞」*Tiroler Heimatwehr-Bätter*を發刊して、社会民主党をげしく攻撃し、二五年十月までに二二号を出した。

シュタイアーマルクでは、二〇年代半ばの数年間、不正規軍団の指導者たちは、民族主義的反政党的な自衛団を、政党内閣に顔を向けた別の小さな護国団と再統一するために、努力を傾けた。一九二五年に両団体の地区部隊は、グラーツのFKVリーダーの指導のもとに、統一軍司令部をつくることに同意した。両者は政治的には依然別々であつたが、護国団指導者のうち軍事的性格のつよい人々は、やがて政党の影響を脱しようと努めはじめた。州知事のリンテレンは、キリスト教社会党に属したが忠実な黨員ではなく、生来の陰謀家であつたから、政党色の少ない、リンテレン志向の一大私設軍団をつくりたいと考へた。二五年十二月以後プフリマーに指導された「郷土防衛隊」*Heimatschutz*は、そのよきな性格のものであつた。この年リンテレンは、「最初の有利な機会をとらえて」ウィーンに進軍する力のある軍団に、必要な裝備を施すための財政的援助を、ムッソリーニから得ようとした。これは成功しなかつたが、彼がファシスト体制への道を開く軍事独裁をウィーンに樹立するつもりであつたことが、窺われる。⁽⁵⁾

上オーストリアの護国団はシュタイドレのアルプス同盟の一員であつたが、州知事のヨハン・ハウザー *Johann Hauser*が民主的傾向の聖職者で、護国団を支持するのを嫌つたために、組織をうまく維持するのは困難な仕事であつた。この州の護国団とハウザーの間を調停したのは、ファニー・シュタレーンベルクで、彼女は敬虔的なカトリック教徒で、ザイペルの友人でもあり、活動的な上院議員であつて、のちの護国団の全国的指導者シュタレーンベルク *Ernst Rudiger*

Stahenberg の母にあたる。彼女はまた二五年七月、バード・イシユルの別荘で、「自衛団」Selbschutzverband の代表者と非社会主義諸政党の間を取りなしたが、この会談は諸政党との休戦をもたらしただけで、同盟関係をつくり出したわけではなく、州の組織をほとんど強化しなかったといわれる。それゆえ何度も、組織の上の努力が繰り返されねばならなかった。

このように護国団運動では、各州独立主義や相互間の競争が顕著であったが、ドイツ人のパプストはオーストリアの利害関係に乱されることなく、真に全国的な不正規軍団をつくるために、根気強く働いた。そして彼は一九二四年の末までに、次のような野心的なプランをつくり上げた。それは、州以下の行政地域とほぼ一致する護国団部隊の階層制度を描いたもので、護国団の県 Kreis グループ、郡 Gau グループ、地区 Bezirk グループ、町村 Ort グループは、旅団(四五)、連隊(一八〇)、大隊(七二〇)、中隊(二、八八〇)に相当し、中隊は各二〇名の四つの小隊から成るはずであった。これに基づいて、究極的には、一倍半の予備軍をもつ二四万の軍隊をつくり上げるのが、彼の希望であった。これは正規軍と警察を合わせたものの六倍に当たる数字である。これに比較して、護国団が二五年一月に各州にもつと自称した「実際の力」は、次表の通りで、そこから推して、当時の護国団の総員数は、ほぼ一〇万と考えられる。

	県グループ	郡グループ	地区グループ	町村グループ
下オーストリアおよびウイーン	7	23	69	207
上オーストリア	5	14	54	216
シュタイアーマルク	5	20	80	340
ケルンチン	5	20	80	280
チヤロール	5	20	80	240

	県グループ	郡グループ	地区グループ	町村グループ
フォアアールベルク	2	6	18	54
ザルツブルク	2	8	24	72
合 計	31	111	405	1409

しかし、このような壮大な計画⁽⁸⁾があつたとはいへ、一九二四—二六年の間は、本質的には、護国団員の忠誠度がテストされる時期であつたといえよう。

- (1) Gulick, op. cit., Vol. I, pp. 683-686; Friedrich Thalmann, "Die Wirtschaft in Österreich", in Benedikt, op. cit., S. 490-496.
- (2) Heimwehr in Österreich, 1934. これは連邦指導者の宣伝局の管理下に出版されたものである。
- (3) 一九二〇年代の中頃には、護国団の団員の数も、二〇年代はじめの約一〇万から、三十五万に落ちこんだという。Edmondson, The Heimwehr, p. 39.
- (4) Edmondson, op. cit., p. 36.
- (5) Edmondson, op. cit., p. 37.
- (6) Ibid.
- (7) Edmondson, op. cit., p. 37 f.
- (8) この表にブルゲンラントのデータがないのは、護国団と共和国防衛同盟がこの州では組織をもたないという協定が、なお尊重されたことを示している。しかし実際には、ウィーン周辺で約一万二千の実兵力をもっていたEKVが、この州に伸びようとしていた。Edmondson, op. cit., p. 38.

九 護国団の社会的構成

次に、当時の護国団の社会的構成をみておきたい。護国団運動の中核をなしたのは、まず第一に、戦争から帰還した復員軍人、職業的な将校や下士官、とりわけ前者であった。敗戦とともに彼らの栄光の時代は終わった。帰郷した彼らの多くは家や土地を失い、そのうえ悪し様にいわれた。新共和国は単調であり文民的であって、彼らに然るべき地位を与えなかった。サン・ジェルマン条約の認めたオーストリアの小軍隊は、旧帝国の多数の職業軍人に仕事を与えることはできず、彼らは辛うじて貧しい生計を立てるほかなかったが、多くの職業は超満員であった。そこで彼らは、自ら進んで私設軍団運動に身を投じ、そこに新しい活動分野を見いだした。そこでは、名譽ある行為のために人々を訓練することができ、人々から崇拜をうけることができ、もう一度高い地位を占めることができた。護国団に新しい好戦的精神をおこしたのも、彼らであった。教師やホワイトカラーになるのに不満な予備将校、戦後零落し称号を剝奪された貴族が、それに加わった。初期護国団組織の幹部を構成し、その業務を処理したのは、主にこれらの階層の出身者であった。^①一九二〇年代中葉の苦しい時期に護国団運動を絶やさずに存続させたものは、彼らの忍耐力と、彼らが州政府や工業家から苦心して調達した財政的援助であった。そのほか、諸州で指導的地位をしめた人々のなかには、大学教育を受けたブルジョア知識人や市民的政治家も若干含まれていた。シュタイドレやプフリマーはこれである。

まもなく多くの学生や若者がそれに加わった。彼らはその年齢のために「かつての栄光の日々」(第一次大戦)に参加することができず、先輩たちの軍功に驚嘆し、しかも戦後の経済不況と平凡な政治のうちに明るい将来をみる事ができず、幻滅を感じ、腹を立てていららしていた。彼らからみれば、社会主義者こそ自分たちの単調で不確実な生活の責任者であり、「もう戦争はいや」という社会主義者のスローガンは、彼らの夢を台なしにする失礼なものであった。^②

今や彼らは、外敵よりもむしろマルクス主義者やユダヤ人など国内の敵と戦いたがっていたのである。

一般兵士の範圍や構成を正確に決めるのは困難であるが、一九一八—一九一九年に護国団が圧倒的に農業的な諸州で生まれた事情に対応して、護国団は最初からその団員の大部分を農業関係者から集め、さらに中小都市のミドルクラスを引きよせた。すなわち護国団の基盤は、農民および山岳諸州の下層ミドルクラスだったのである。農民は社会主義者からの恐怖を直接感ずることは少なかったが、オーストリアの社会民主党とロシアのコミニストをはっきり区別する力はなく、社会主義者が独立小農民の農場にも火をつけようとしているという宣伝と扇動が、彼らの恐怖を助長した。教会も、教区聖職者を通じて、非宗教的な社会主義者を罵倒した。農民はこれらの影響をうけて、護国団に続々と志願したのである。社会民主党は一九二五年に農業プログラムを取り入れて、貧農や農業労働者の支持を得ようと努めたが、ごく限られた成功しか収めえなかった。

労働者については、わずかの地域でその存在が認められるが、圧倒的に農業労働者や林業労働者であり、商・工業労働者はごく稀であった。一九二七年以後はじめてかなりの数の労働者が加入したが、これは主として、ドイツ人の管理するアルプス鉦山会社 Alpine-Montan Gesellschaft が支配力をもった工業地域にみられる現象である。⁽³⁾一九二八年に護国団が自称した一五万の団員のうち、約七〇%は農民、二〇%は学生と町の住民、一〇%が労働者であったと推定されている。そのうち軍務に活用できたのは、約五万二千にすぎなかったといわれる。

次に、ガリックが護国団の社会的基礎をリスト・アップしている興味ある例をかかげよう。⁽⁴⁾彼は、護国団に加入し運動した人々「団員に限らず、財政的・政治的援助によって護国団を支持し促進した人々をも含めてあげているのが、いかえれば、護国団が活動した文脈全体を問題にしているのが、特徴的である。彼によれば、護国団を支えたのは次のものである。

- | | |
|----------------------------------|---|
| 1) 基 | 金 |
| 2) 財界上層部 (支配的金融勢力) | |
| 3) 若干の比較的重要な大地主 | |
| 4) カトリックの傾向の多くの政治的指導者 | |
| 5) 多くのカトリック聖職者 | |
| 6) 旧王国の崩壊によって零落した不満な将校や貴族 | |
| 7) 政治的冒険家 | |
| 8) 大農グループ | |
| 9) 小さな商工業者や実業家および立ち襟カラーのプロレタリアート | |

一〇 リンツ綱領と護国団の活性化

一九二七年七月の騒乱の発端になったのは、この年の一月三十日シャッテンドルフにおこった射殺事件である。そこで最後に、この事件に先立つ半年余りの護国団の動きをみることにする。

一九二六年には、護国団の活動はなおあまり人目を引かなかったけれども、かなり速度を増したことは事実である。

護国団の援助者はキリスト教社会党と教会、それに実業界、商業界の人々であつたことが、ここから窺われる。

なお、ガリックによれば、このような構成の異質性は、イデオロギーの領域にも対応しており、護国団のイデオロギーの矛盾の大部分は、一般団員や指導者の社会構成と関係があつたといふ。

- (1) Carsten, op. cit., p. 330.
- (2) Guido Zernatto, Die Wahrheit über Österreich, 1933, S. 71-73; Edmondson, "Early Heimwehr", p. 132.
- (3) Edmondson, The Heimwehr, p. 39.
- (4) Gerhard Botz, Soziale "Basis" und Typologie der österreichischen Faschismen im innerösterreichischen und europäischen Vergleich", in Jahrbuch für Zeitgeschichte 1980-81, S. 20-26; Gulick, op. cit., Vol. 1 p. 25.

下級兵士の大部分はなお、自己の任務を主として防衛的なものと考えていたが、シュタイドレらの指導者はこの考えを打破しようとして、政治問題における護国団の主導性を打ち出し、これへの支持を喚起するために全力を傾けた。この年の五月と七月に行なわれた社会民主党の大デモが不安をかき立てたこと、議会選挙の接近が懸念をあらわしたことも、護国団指導者の利用すべき好材料であった。インスブルックの新ドイツ領事ザラー H. Saller は、八月、ティロールの護国団がしばしば山地で演習を行ない、社会民主党に対して今まで以上にきびしい態度をとっていることに注目し、好戦性の増大に驚きを示すとともに、護国団が政府の措置に反対して実力行使する恐れがあることを指摘し、その運動は州政府に現実的な危険をつきつけている、と警告した。⁽¹⁾

十月二十六日シュタイドレは、社会民主党とブルジョアジーの双方をばげしく攻撃する演説を行なった。社会民主党が新綱領を提案したのに応酬して、「われわれは政権のための戦いにおける決定的段階に入った」と断言し、受動的な自衛ではなく活動的な自立のみが、外国の議会主義の死産の翻訳によってつくり出された困難を一掃することができ、現在必要なのは、ブルジョアジーによる捧げ物だけではなく、護国団指導者への信頼、訓練、団員の無条件服従である、と論じた。⁽²⁾

一九二六年十一月三日に社会民主党がリンツ党大会で新綱領を採択したことは、護国団活動を活性化する重大な転機になった。護国団の指導者たちはこの新綱領を、新しい支持者を獲得するための手がかりにした。リンツ綱領は、党が民主的共和国の枠内で行動することを保証していたけれども、労働者階級はブルジョアジーが挑発的な反革命に走るのを防ぐために、共和国を守り、内乱の際に国家権力を獲得し、「独裁の手段によってブルジョアジーの抵抗を打ち破る」に足るだけの軍事力を制しなければならぬ、とつよく主張していた。⁽³⁾シュタイドレを先頭とする護国団指導者たちは、社会民主党があたかもプロレタリア独裁を樹立するために暴力の使用を唱えているかの如くに、これを歪めた。リ

ンツ大会の二週間後に、シュタイドレは「健康な良識の独裁」を要求し、社会民主党委員長オットー・パウアー Otto Bauer を「教えこまれた」民主主義者として、山地諸州の「生まれながらの」民主主義者と対比させた。さらに別の演説では、オーストリアの社会主義者はロシア以外で最も急進的な社会主義者であり、オーストリアのブルジョアジーはヨーロッパで最も受動的なブルジョアジーであるという、得意のテーマを展開した。

シュタイドレはペプストに支持されて、国内全州を含む一大軍事的・政治的運動を形成しようとする努力を強めた。十一月、シュタイアーマルクの二つの組織の指導者はアルプス同盟に加わり、この同盟は「自衛団連合」Selbstschutzverbände と名称を変えたが、各州の団体はなお大きな自主性を保持した。新連合はヒルトル大佐配下の FKV をも、緊密な協力関係に引きこんだ。シュタイドレは依然新連合の実行委員長であったが、特別の権力はなかった。

社会民主党と共和国防衛同盟に対する宣伝戦の高まりをみて、シュタイドレの新連合になお属していなかった下オーストリアの自衛団は、取り残されまいとして、一九二六年末に小パンフレットを発行し、「国内の危険」について警告した。その要旨は、二七年早々行われる予定の選挙への懸念をみせて、もし「ポリシェヴィスト」が三〇万票を追加して多数党の地位を占めるならば、彼らは軍隊を無力にし私有財産を廃止するために、その「赤い護衛隊」を使うことができる、というものであった。この文章の筆者カルク・ペーベンブルク Arthur Karg-Bebenburg 前男爵は、社会民主党が小農の票を集めようと努力しているから用心するよう注意を喚起し、「赤」の宣伝は大地主に向けられているが、真の目的はすべての私有財産を廃止するにある、と警告した。ポリシェヴィストに反対のものは、こうした困難に直面する前に、悔りがたい対抗勢力をつくらねばならない、家がすでに燃えている時に消防署をつくっても無駄である。と、というのが彼の主張であった。

一九二七年の第一週までに、護国団陣営に不安な緊張の存在することが明らかになった。ザラー領事によれば、シュ

タイアーマルクとケルンテンの護国団指導者もF K Vのヒルトル大佐も、もはや自身の兵士を抑えることはできないと明言した。彼らは来たるべき選挙を案じ、もつと直接には、アルバニアをめぐるイタリア・ユーゴスラヴィア間の緊張が交戦状態に発展するならば、南部諸州が衝突の舞台になるであろうと予想し、懸念した。護国団指導者たちは再びクーデタを真剣に考え、ウィーンへの進軍を口にしはじめた。彼らは政府を制圧し、執政内閣を樹立する計画を立てたが、そこでは当然シュタイドレが首相として、指導的役割を演ずるはずであった。パプストは、護国団と共和国防衛同盟との間に戦闘がおこった場合、イタリアは好意的中立を守るといふ暗黙の保証を受けていた。以上のようなザラーの報告をみれば、二七年のはじめに護国団指導者たちがある種の反乱を企てようとしていたことは、ほとんど疑いないように思われる。

しかし彼らはまもなく、時機がよくないと判断した。おそらく、ウィーンおよび下オーストリアでの共和国防衛同盟の力の強化に直面して、反乱はほとんど成功のチャンスがないと感じ、また外国の干渉の見込みを恐れたに違いない。しかし、彼らをこのような判断に導いた直接の原因は、財政的援助者たちが危険を冒す気持を共有しなかったことであった。ザラーは、それまで護国団に快く出資していたティロールの製造業者協会長が、「その時点で」一揆の計画を実行することには反対した、と報告している。護国団はドイツにも支持を懇請する使者を送ったが、同様の抑制に会った。ドイツ政府は護国団の潜在的な支持者たち、特に鉄兜団 *Stahlhelm* とエンシェリヒに「オーストリアでポートを振り動かさぬよう」⁽⁵⁾ 勧告した。

一月第二週のはじめには、ザイペル内閣には自然の経過を辿らせるべきであり、選挙の結果が受け入れがたいものである場合に限り、行動の計画は立てらるべきであるという考えが、優勢になった。一月末に護国団の参謀長がインスブルックに集まったとき、シュタイアーマルク代表を除く全員は、彼らの兵士が「危急の際に」さえウィーンに進軍する

かどうか疑わしい、との見解を述べた。この会合は、行動計画がはっきりしないまま、若干の混乱のうちに解散した。⁽⁶⁾

一月三十日クラークゲンフルトで催された公開の大会と関連して、重要な会議がもたれたが、この席で護国団指導者たちは、攻撃的な計画を当分の間延期することを、最終的に決定した。シュタイドレは公開演説のなかでオーストリアにおける内乱の展望にふれ、「自衛」から「自立」への変更を再度求めたけれども、指導者たちの私的な論議のなかでは、全国の政治よりも内部の組織の問題の方が大きく扱われ、温和派が急進派を制した。野心的な一揆主義者とみられていたヒルトル大佐も、多数派と行を共にすることを承知した。こうして「積極的」行動は、春の全国選挙の後まで延期されることになったのである。一九二七年七月以後のはなばなし諸事件の陰にかくれて、これらの陰謀は顧みられぬままになってきたが、不正規軍団の指導者たちが自己の課題を単に防衛的なものと考えず、実際に政治権力を獲得しようと望んだことを示すものとして、重視されねばならない。

- (1) この時期のザラーの本国あての報告をはじめ、本章のテーマにかんする重要史料は、Politisches Archiv des Deutschen Auswärtigen Amtes (Bonn), Abteilung II, Politik 2, No. 3 (Heimwehrorganisation in Österreich) に収められている。
- (2) Edmondson, op. cit., p. 40.
- (3) 拙稿「一九三四年の内乱とオーストリア社会民主党」(『成城法学』一一号)六ページ参照。
- (4) Edmondson, "Early Heimwehr", p. 136.
- (5) Edmondson, op. cit., p. 137.
- (6) Ibid.

一一 むすび

以上、一九二七年一月末までの初期護国団運動の経過を一通りたどったあとで、最後にその要点をまとめながら、若干の所感を付け加えて結論にかえたい。

オーストリアの私的武装団体護国団は、ハプスブルク帝国崩壊後の諸州、特に南部国境地域の混乱状態のなかから生まれた。それは、秩序を維持し財産を守り脅かされた国境を防衛するために、自然発生的に現われたものであったが、その圧倒的多数は、急速に右翼的・反マルクス主義的性格をもつようになり、政治化の道をたどった。オーストリア護国団の初期の発展のうへで特に注目されるのは、ドイツ(バイエルン)およびハンガリーの右翼勢力と緊密に結びついてきたことであり、それと関連して、ティロールにおけるシュタイドレとパプストの役割が顕著だったことである。これと並んで、キリスト教社会党の護国団支持をもたらすうへでザイペルのはたした重要な役割を、みのがすことはできない。分裂した地方組織であった護国団が、一九一九―二〇年に、バイエルンの自衛軍団をモデルにしてもか、くも一つの傘形組織にまとまることができたのは、キリスト教社会党の後援に負うところが大きかった。この傘形組織は、バイエルンの諸軍団およびハンガリーからの援助と結びついて行動しながら、社会民主党を首班とする連合政府を打倒するための反革命運動を進めようとした。一九二〇年と二十一年の反乱計画がそれであり、この時期は、護国団の最初の活動期であったといつてよい。

しかし、一九二〇年夏のレンナー政府の辞任によって生じた思いがけない政治情勢の変化は、反乱計画の実行を不可能にした。その結果、早くも二十一年には、たがいに異質な多数の護国団組織は苦しい危機に襲われたが、それにもか

わらずこの危機は、護国団運動が崩壊する結果をもたらさしはしなかった。反対に、パプストはシュタイドレや工業家とのつながりを利用して、一九二二―二五年の間、護国団への資金供与を続けさせた。この時期は、オーストリアの国内事情が政治的・経済的に一応安定し、もはや反乱が可能な状況ではなく、二七年中頃までは、護国団の力は衰え、不活発な冬眠状態にあった。しかしこの間も、護国団は工業家や金融家に支持された反議会主義的な「暴力の核」であり続けたし、そればかりか、アルプス諸州の護国団指導者たちは、運動の野心的な政治目標を系統的に打ち出し、軍備の維持に努め、一九二六―二七年の冬には、再び武装反乱の実行を真剣に考えている。

とすれば、一九二七年の七月事件が死にかけていた護国団を突然生き返らせたとみるのは、誤りといわねばならない。この事件を契機にして政治の前面に躍り出た護国団の姿がはなやかなだけに、それに先立つ初期、とりわけ二〇年代中葉の沈黙期は、従来ほとんど顧みられなかったけれども、将来効果的に行動するための準備が整えられつつあった貴重な「形成期」として、正しく位置づけられなければならない。これが本稿の考察の帰結である。

最後に若干所感をつけ加えたい。第一に、護国団が外国勢力の介入を通じてはじめてその力を伸ばすことができたのは、この国の地理的位置にもよるが、同時に、強大な勢力の間にはさまれた自主性を欠く弱小国の悲哀を示す、運命的なものであったともいえよう。のみならず、バイエルンやハンガリーの援助はたしかに護国団の発展に寄与したけれども、同時にまたそれは、オーストリア護国団自身のスムーズな発展の障害条件にもなったのであって、この点は注目し値する。

第二は、ザイペルの護国団に対する態度である。彼は護国団を自己の権力維持に必要な補助手段として、その発展を促進したけれども、護国団が単なる援護部隊以上のものとして自立しようとする、むしろこれを抑制した。これは、のちのショーバー、ドルフス、シュニツニックにもみられるオーストリア歴代政府の基本姿勢であり、護国団がやが

説 退て衰退する一因は、ここにあったといえる。

論 第三は、護国団の活気と沈滞が社会民主党の発散する脅威の強弱と密接な関係をもっていることである。護国団はまず、一九一八年から二〇年に至る、社会民主党が連合政府を主導した時期に発生し、これへの活発な反応をみせた。そして、社会民主党が連合政府を去り、オーストリアが控え目ながら安定期に入った直後の二三年から沈滞期に入り、二六年后半社会民主党がリンツ綱領を採択して氣勢をあげると、再び活性化した。われわれはここに、外部の事情に左右されやすい、自主性に乏しい護国団の基本的性格をみる事ができよう。

第四に、イデオロギーの貧困も、護国団の大きな欠陥の一つであった。指導者が共通につよく打ち出した「反マルクス主義」を別にすれば、その思想内容ははなはだ貧しかった。彼らの目標はオーストリアの伝統的社会秩序の救済であったが、それは時代錯誤の復古的なもので、なんら前向きな建設的なものではなかった。これは、護国団が基本的に田園的貴族的農民的な運動であったことを思えば当然ともいえるが、やがてナチスとの競争に敗れる重要な原因だったのである。

《Summaries of Contents》

The Early Heimwehr Movements in Austria

Toshitaka YADA*

The Heimwehr, Austrian paramilitary organizations, is particularly noteworthy in the history of Austrian Fascism. It grew out from the chaos of the immediate postwar period, 1918-19, but had only slight influence during Austrian years of relative political and economic stability before mid-1927. It was only after the events of July, 1927 that the Heimwehr became a major political force and contributed significantly to the creation of an authoritarian regime. Such a positive aspect of Heimwehr has been already fairly well known. However, little research has been done about the early history of Heimwehr before 1927 and its real image is still not so clear.

Fortunately, in recent years some new excellent researches have been done on this subject. Depending these works, I intend to throw fresh light on the history of early Heimwehr and make a few comments on this.

During its early stage of development the Heimwehr had extremely close ties with foreign countries, especially Germany and Hungary. In this case the roles played by Richard Steidle and Waldemar Pabst in the Tyrol must be noticed. Ignaz Sepel, later chancellor, also played an important part in obtaining the support of the Christian Social Party for the Heimwehr. Only through the assistance of this party it was possible in 1919-20 to build up a kind of cover organization to provide a shelter for the badly disunited Heimwehr groups. By acting in conjunction with the Bavarian units and with assistance from Hungary, this umbrella organization definitely would have been able to precipitate a revolutionary movement to overthrow the Renner coalition government. But the change in the political situation brought about by the resignation of the Renner government made it impossible to put the putsch plan

* Honorary Professor of Hokkaido University.

into effect. Consequently, as early as 1922, the various Heimwehr groups were struck by a painful crisis, which, nevertheless, did not end with the movement's falling to pieces. Pabst used his connections with Seipel and industrialists to urge them to finance the Heimwehr organizations during the years 1922-25. Then the internal situation in Austria was such that a putsch was no longer possible and the Heimwehr organizations were largely dormant.

Nevertheless, Heimwehr leaders in the Alpine provinces have formulated ambitious political goals for the movement, attempted to maintain the organization's military preparedness, and seriously contemplated trying an armed putsch in the winter of 1926-27. Like this, the Heimwehr was obviously getting ready for acting effectively in the following years.

So we must regard the state of early Heimwehr before 1927 not only as a long hibernation but also as an important formative stage for its subsequent brilliant activities.

Moreover I want to point out several remarkable respects concerning Heimwehr affairs. 1) Though Seipel ostensibly promoted the Heimwehr, he was resolved to assign to it only an insignificant political role, and this attitude was succeeded by the following Austrian chancellors—Schober, Dollfuss and Schuschnigg. That was one of the effective factors which lead the Heimwehr to final failure. 2) The chronology of the Heimwehr's rise and fall is closely related to the imagined threat of Marxism. The Heimwehr first arose when the Social Democratic Party was in the coalition government between 1918-20. It declined in 1923, soon after the Social Democratic Party left the federal government and Austria was beginning to become modestly prosperous. It revived following the proclamation of the Linz Program. This proves that the Heimwehr had no firm independence and was easily influenced by others. 3) Lack of definitive ideology was also a main fault of the Heimwehr. Except the obvious anti-Marxism which was common among the Heimwehr leaders, their aim was nothing more than to save Austria's traditional social order. This was no doubt retrospective and out of date. The Heimwehr can be characterised largely as a rural-aristocratic-peasant movement and so a clearly Catholic-conservative orientation was appropriate to it. Such non-attractive character of the Heimwehr was just the reason why it was soon defeated in competition with Nazis.